

童話

原民喜

青空文庫

人ががやがや家のうちに居た。その様子がよくは解らなかった。誰か死んだのではないかしらと始め思へた。生れたのだと皆が云った。誰が生れたのか私には解らない。結局生れたのは私らしかった。

生れてみると、私はものを忘れてしまった。魚や鳥やけだものの形で闇のなかを跳ね廻ったり、幾世紀も波や風に曝されてゐたのは私ではなかったのか。

私は温かい布に包まれて、蒲団の上に置かれた。それが私には珍しかったが、同時頼りなかった。気持のいい時は何時までもさうして居たかったが、時々耐らなく厭なことがあつた。家の天井とか、電燈とか、人間の声が私を脅した。眼が覚めて暗闇だと、また私は死んだのかなと思つた。しかし、朝が来ると、私の周囲はもの音をたてて動くのであつた。

私が母を覚えたのは大分後のことだつた。母を知つた瞬間は一寸不可解な気持だつた。その顔は他人でもないし、私でもなかった、つまり突然出現した一つの顔であつた。それから大分した後、父とか兄姉を識つた。或る朧氣な意識が段々私を安心せした。私一つがぼつんと存在するのではなく、私に似たやうなものが私の周囲にあつて動く。しかし不思

議なことに彼等はそれがあたりまへのやうな顔つきである。私は時々彼等の顔が奇異に見えた。

私の眼の前にある空間はもう不可避だった。空間にはさまさまの苦痛と快樂が混つてゐるやうに思へた。あまり長い間視凝めてゐると、眼が自然に瞬^{まばたき}する。すると忽ち空間が新しくなった。が、次の瞬間にはやはりもとの空間だった。私はもう大分長い間生きて、生活にも慣れて来たやうだった。乳が足りて睡りが足りたので、恍惚と眼を空間に遊ばせてゐた。すると何処からか微風が走つて来て、私の頬べたを一寸撫でた。私は微笑した。

母が私を抱いて家の外に出た。すると遽かに眼の前が明るくなった。そこは私にとって見馴れないものばかりだ。菜の花の上を蝶々が飛んでゐた。私の掌の指はそいつを見ながら動いた。すると蝶々は高く高く舞上った。くらくらする眩しい梢の方で葉が揺れた。私は蝶々が木の葉になつてしまったのかと思つて、掌を上挙げた。が、掴めなかった。

私は池の鯉を見た。鯉は水のなかに気持よきさうに泳いでゐた。

朝、夕、雀が訳のわからぬことを云つて啼く。私以外のものは大概ものを云ふのに、私はものが云へないからもどかしい。ものが云へないのは壁や柱だが、時計は絶えず喋つて

ある。夜なんか特にガンと大きな響がしてびっくりさす。しかしそれが鳴り止むと、今度はチツキンチツキンと忙^{せは}しい音が続く。逃げろ、逃げろ、とその音は急^せかしてゐるやうだ。どうして逃げなきゃならぬのか、何処へ逃げたらいいのかは解らないのだが、私は妙に絶望的な気持にされる。私の気持は熱に浮かされたやうになる。

大人が私に馬の絵を見せて、頻りにその真似をしてみせる。すると私も馬になったやうな気持がする。非常に速く走ったり、暴れたりすることはどんなに愉快か、私も自由に動いてみたい衝動で一杯なのだ。大人の腕によつて私の身体が楽々と持運ばれて行く時、障子や、天井や、畳は私のほとりを動く。

障子や、天井や、畳が動かない時、その時は全体が何か一つの怪しい謎を秘めてゐるやうだ。特に夕方、電燈の点かぬ前がさうだ。現在の私は腥い塊りで、それが家のなかに置かれてゐる。家の上には暮方の空が展がつてゐる。そして、それはすべて確なことだが、確なことほど朧氣でならない。

熱が出て私は寝かされてゐた。何処かでしーん、しーんと不思議な音が続いた。眼を閉

どてゐると、見たこともない老人が現れて来て、何か難しいことを云って私を責め出した。泣かうと思ふのに声は出ない。はつと思ふと、私と同じやうな子供が、実に沢山の子供達が左右から走つて来ては衝突して倒れる。倒れても倒れても後から子供達は現れて来る。一頻り合戦が続いた後、一匹の馬が飛び出して来た。見れば皮を剥がれた馬で、真赤な肉をピリピリさせてゐる。

ふと気が着くと、私はまだ死んではゐなかつた。母の手が私の額をちつと抑へてゐた。私は何だか嬉しくなつて、つるりと笑つた。

ひとりで私は畳の上を這ひ廻つてゐた。そこに転がつてゐるのは犬の玩具だが、私はもう珍しくはなかつた。しかし、ふと犬の耳を引張つてみると、それは簡単に振げさうになつた。私は夢中になつた。と、その時私を後から誰かが軽く抱き上げたので、犬の耳を持つた儘、私は高く挙げられた。相手は巧みに私を抱きかへて、何か云つた。見知らぬ女に抱かれたのだと気が着いても、私は別にむつがらなかつた。女は私に頬をすり寄せた。それから私を畳へ下した。もう私は犬の耳へ気を奪られなかつた。その女が家にゐる間、その女を私は不思議に感じた。私は作り変へられるのだらうか。

或朝、家の外を楽隊が通った。単純な、浮立つばかりのメロデーが私を誘惑した。楽隊は皆を引連れて、山を越え、谷を越え、海を渡って、何処までも、何時までも続いて行くのだから、君にも従いて来給へと云ふ風だった。遠ざかって行く楽隊を見送って、私は耳の底にふわふわと動くものを感じた。もしやもう一度、楽隊は帰って来はすまいかと、毎日私は待った。

青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日初版発行

入力：蔣龍

校正：伊藤時也

2013年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

童話

原民喜

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>